『言語文化研究紀要』*SCRIPSIMUS* No.29, 2021

琉球語の「わじわじー」について

島袋　盛世

1　はじめに

言語は変化する。語彙も例外ではない。Every word has its own history と言語学者はいう。古い語や表現が現在も使われている場合もあれば、これまで使われてきた語や表現は新しいものへ置き換わり古いものは失われる場合もある。

日本語と琉球語は共通の親言語から変化し、現在の「形」になったと言われている。姉妹関係にあるので、発音に多少の違いがあっても共通の語彙があることは容易に理解できる。日本語と琉球語はよく比較され、日本語では既に失われた古語が琉球語では現在も使われていると指摘される。

沖縄語の那覇方言に「わじわじー」[wadʒiwadʒiː] という語がある（内間・野原 2006）。これは腹立たしい感情を表す語で、「わじわじーすん」（腹が立つ）、「わじわじーそーん」（腹を立てている）というように使われている。文末の「すん」「そーん」はそれぞれ日本語の「する」「している」と同じ意味である。沖縄語を母語とする世代だけでなく、日本語を母語とする沖縄の比較的若い世代でも「わじわじーする」「わじわじーしている」というように、日本語を話す際にも使われている。この語は沖縄語だけではなく、国頭語でも使われており、例えば、与論島では「わじわじ」[waʒiwaʒi]（怒り。腹を立てること）（菊・高橋 2005）、今帰仁方言では「わぢ（ー）わぢー」[wadʒi(ː)wadʒiː]（怒り。怒りでむかむかすること。腹を立てること。）（仲宗根 1983）という。八重山語の竹富島方言でも使われているが、沖縄語からの借用語だと考えられている（前新 2011）。

実はこの「わじわじー」という語は日本語の古語の「わぢわぢ」[1] と同源である。これについては、中本（1976:66）が既に指摘している。「わじわじー」は琉球諸語全てに共通する語ではなく、その使用はある特定の言語・方言に限られている。日本語においても「わぢわぢ」と同源の語はある地域の方言にだけみられ、多くの方言では失われている。

本稿ではまず、日本語の古語「わぢわぢ」が使われていた時代や語の意味、そして実際に使われていた用例を確認する。次に現代の琉球諸語・方言と日本語方言において「わぢわぢ」と同源である可能性がある語を音声・音韻や語構造及び意味の観点から分析し検証する。さらに「わぢわぢ」系の語の分布からみえてくる伝播過程を考察する。

本稿で言及する琉球語及びその諸言語の分類については UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger（http://www.unesco.org/languages-atlas/en/atlasmap/language-id-1975.html）に基づく。

2　日本語古語「わぢわぢ」について

「わぢわぢ」という語は室町時代前期から江戸時代の文献にみられる。この語がどのように使われていたか、以下に例をいくつかあげる。室町時代前期に書かれた『太平記』、同時代後期に成立した『史記抄』、室町時代末期から江戸時代に流行した浄瑠璃、そして江戸時代の文学と言われる浮世草子など多くの文献に確認できる。

「泪を流してわぢわぢと振るひければ、」（『太平記』）[2]

「寒心するとは・・・ 寒い時わちわちと振ふ様なぞ」（『史記抄』）[3]

「身の毛も立って恐ろしく、わじわじ震うてゐたりしが、」（『近松門左衛門集』）[4]

「その銭持ちながら、わぢわぢわぢと身震ひして、そこへこけたが最後也。」（『西鶴織留』）[5]

「わじわじ震うて返事もせず、身ぜゝりしてぞゐたりける」（『近松門左衛門集』）[6]

「盗みしてわぢわぢ振ふ夜や寒き」（『小松原』）[7]

「無体を言ひかけるに、この男わぢわぢふるひ」（『義経記』）[8]

実際にどのように使われていたか参考まで『史記抄』の実例を下に示す。右頁の左から２行目に上にあげた例を確認することができる。

（岡見・大塚 1971:394）

「わぢわぢ」の意味を確認しておこう。国語辞典や古語辞典などには、以下のように記されている。

「寒さや恐怖などのために震えるさまを現す語。わなわな。ぶるぶる。がたがた。」

『日本国語大辞典』（日本大辞典刊行会 1976）

「恐怖や寒さのために震えるさまをいう語。わなわな。ぶるぶる。」

『角川国語大辞典』（時枝・吉田 1983）

「寒さや怖れのためにふるえるさま。わなわな。わだわだ。」

『広辞苑』（新村 2008）

「恐ろしさや寒さのために体が震えるさま。ぶるぶる。」

『岩波古語辞典』（大野・佐竹・前田 2008）

「恐れや寒さのためふるえるさま。わなわな。」

『新明解古語辞典』（金田一・他 1978）

「恐ろしさや寒さで身の震えるさま。わなわな。ぶるぶる。」

『古語大辞典』（中田・和田・北原 1983）

上の記述によると、「わぢわぢ」は寒さや恐怖のため震えるさまを表す語であることがわかる。また、意味の記述の中に「わなわな」[9] とあることから、怒りのため震えるさまも含まれる。

3　琉球語の「わじわじー」

「わじわじー」という語は、「わじーん」（腹を立てる。怒る）のような動詞形もあり、「わじらん」（怒らない）や「わじたん」（怒った）などのように使われる。那覇方言以外の沖縄語の方言でも同じように使われている。首里方言、久米島方言、うるま市の石川方言の例を下にあげる。３つの方言とも「わじわじー」の語形は同じであるが、「怒る」を表す動詞形には「わじゆん」や「わじーん」などの語形がある。

首　里：わじわじーしょーん（まさに怒りが発せんとしている）
　　わじゆん（怒る）　（国立国語研究所 1976）

久米島：わじわじー（盛んに怒ること。怒りが込み上げること）
　　わじゆん、わじーん（怒る。腹を立てる）、わじらすん（怒らす）
　　（波平 2007）

石　川：わじわじーふん、わじわじーしならん（怒る）
　　わじーん（怒る）　（山城 2009）

国頭語にも上の「わじわじー」と同源の語が存在する。以下に国頭村安波、大宜味村田嘉里、今帰仁村、伊江島、伊是名島の例をあげる。母音の長さや語尾が多少異なるが、基本的に同じ語幹をもつ語であることが確認できる。

安　波：わじわじー（怒り心頭）
　　わじん（怒る）　（宮城・宮城 2016）

田嘉里：わじわじーすん（怒りが込み上げてくる）
わじーん（怒る）（宮城 2000）
今帰仁：わぢーわぢー、わぢわぢー（怒り。怒りでむかむかすること）
わぢーるん（怒る）（仲宗根 1983）
伊江島：わじわじしゅん（非常に腹が立つ）
わじゅん（怒る）（生塩 1999）
伊是名島：わじわじー（癪に障るさま。怒りが込み上げるさま）
わじーん（怒る）（伊是名島方言辞典編集委員会 2004）

国頭語には沖縄本島北部の方言だけではなく、沖永良部島や与論島の方言も含まれる。与論島では「わじわじ」（怒り。腹を立てること）が使われており、「わしゃわしゃ」（怒りや忙しさでいらいらするさま）という表現もある（菊・高橋 2005）。沖永良部島方言では「わじわじー」のような語形で「怒る」や「腹を立てる」などを意味する語の存在は確認できない。「腹を立てる。怒る」という意味ではないが、沖永良部島の方言には「がたがた震えているさま」を表す「わじゃわじゃ」という語がある。以下のように使われている。

çiːsanu wadʒawadʒa ʃumu　（寒くてがたがたふるえている）（中本 1982:37）

この語の意味は前述の古語「わぢわぢ」の意味の一部に共通する。与論島に「わじゃぶるい」（ぶるぶる震えること）（菊・高橋 2005）という語があるが、この「わじゃ」も同源である可能性がある。

また、上述の語彙以外に沖永良部島知名町に「わしみきゅん」、和泊町に「わしみちゅん」（平山 1986:129）、与論島に「わしゃみきゅん」（菊・高橋 2005）という語があり、いずれも「腹をたてる。怒る」を意味する。一見、これらの語は先にあげた「わじわじー」と同源のように思えるが、「わじわじー」ではなく首里方言の「わじゃみゆん」[wadʒamijuɴ]（しわをよせる。顔をしかめる）と同源であると思われる。「わじゃみ」は「しわ。しかめ面」の意である。（国立国語研究所 1976、参照）

奄美語には「わぢわぢ」または「わじわじー」と同源の語は確認できない。奄美語では「腹を立てる。怒る」を表す語は主に [tatari] などを語幹とする表現が使われ、喜界島では [k'imu]（肝）を含む表現が使われている。下に例をあげる。

奄美大島：t'at'ari、t'a t'aruri（怒る。腹を立てる）　（長田・他 1977・1980）
　　tatarjuɴ　（平山・大島・中本 1967:425）
徳 之 島：tatarui　（平山・大島・中本 1966:397）
喜 界 島：k'imuʔidʒijuɴ　（平山・大島・中本 1966:397）

喜界島の [k'imuʔidʒijuɴ] は [k'imu]（肝）と [ʔidʒijuɴ]（出る）から成る複合語だが、「肝」という語を使って「怒り」を表している語は他の琉球諸語にもみられる。既に取り上げた国頭語から例をあげると、「わじわじー」が使われている与論島方言にも [kimuiʒibe:saɴ]（怒りっぽい）という表現があり（菊・高橋 2005）、今帰仁方言には [tʃimugusa:mitʃi]（気がいらいらして怒ること）という語がある（仲宗根 1983）。

宮古語でも「肝」という語を使い、「怒る」を表す表現が作られている。また、伊良部島では「肝」以外にも「腹（わた）」[bata] を使った [batafusariʔɨ] という表現もある（富浜 2013）。多良間島の [baʃadzɨ] は一見「腹（わた）」を含む複合語と判断してしまいがちだが、多良間島で「腹」は [bada] といい、[badafuɛari-l]（ひどく腹を立てる）などのように使われる（下地 2017）。多良間島の語頭の [ba] は沖縄語や共通語の [wa] に対応し、[ʃa]（または [ɛa]）は [sa] に対応する。以前は *wasa- のような形をしていたと考えられる。以下に伊良部島、多良間島、大神島、宮古島、来間島の「怒る」を表す語例をあげる。

伊良部島：tsɨmudil[10]、batafusariʔɨ[11]
多良間島：baʃadzɨ[12]
大 神 島：kˢima:iti[13]
宮 古 島：kˢimuidi

来 間 島：tsɨmuidi　（琉球大学沖縄文化研究所 1968:33）

宮古語とは異なり、八重山語の「腹を立てる。怒る」を意味する表現には主に [kundʒoː] ~ [kundzoː] という語が使われている。西表島方言の [badahusaɾuɴ] のように [bada]（腹）が使われている方言もある（平山・大島・中本 1967:425)。以下に石垣島、竹富島、波照間島、黒島の例をあげる。

石　　垣：kundʒoːʔidiɾuŋ、kundʒoːʔidiŋ　（宮城 2003）
竹　　富：kundʒoːukuɾiruŋ[14]、kundʒoːndʒiɾuŋ、kundʒoːndʒiŋ
（前新 2011）
波 照 間：kundʒoːndʒiɾuɴ　（平山・大島・中本 1966:397）
黒　　島：kundzoːndʒiɾuɴ　（平山・大島・中本 1967:425）

与那国には [kundundiɾun]（怒る）がある（平山・大島・中本 1967:425)。[15] 与那国語でも宮古語や八重山語と同様、「わじわじー」は確認できない。

琉球語の「わじわじー」についてみてきたが、「わじわじー」が使われているのは国頭語と沖縄語に限られることがわかった。国頭語が話されている地域の北方にある奄美語や沖縄語が話されている地域の南西に位置する島々では確認できない。非常に興味深い分布である。

4　現代日本語方言と古語「わぢわぢ」[16]

先の項で琉球語の「わじわじー」はほとんどが「腹を立てる。怒る」という意味で使われており、国頭語のいくつかの方言では寒さで震えるさまをあらわす語彙もあることを示した。この項では現代日本語の方言に焦点をあて、怒りや恐怖、または寒さのため震えるさまを表す語彙の中に、古語「わぢわぢ」と同源の語が存在するかどうかみていく。

まず始めに、「怒る。腹を立てる」だが、日本語方言には多様な語彙が存在する。ここで全てを列挙するわけにはいかないが、主なものとそれが使われている方言をあげると以下のようになる。

えせる	青森県、岩手県、山梨県
いぼる[17]	栃木県、群馬県、埼玉県、新潟県、長崎県壱岐島
きまく	秋田県北部
ばちなる[18]	静岡県、和歌山県
くるー	宮城県、新潟県佐渡、大分県
ほてむく	富山県
むしゃける	石川県
いんぶりかく	長野県南部、静岡県、愛知県
どくれる	京都府、兵庫県淡路島、和歌山県、岡山県、 山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県
ごーがわく	富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、 愛知県、三重県、滋賀県、兵庫県、鳥取県、島根県隠岐島、 岡山県、山口県、徳島県、香川県、福岡県、大分県

その他、「うだる」「えらかす」「つったつ」「わかす」など非常に多種多様であるが、「わぢわぢ」と同源の語は確認できない。

前述の語と同様、「恐ろしい」や「恐れる」または「怖い」を意味する語彙も非常に多い。しかし、「わぢわぢ」と同源と考えられるような語は確認できない。参考までに以下に語例をあげておく。

「おそろしい」	えすい、えじー、おぞい、おとろしー、きょーとい、 こいしー、さびしー、ぼえー、など
「おそれる」	いびせがる、えずがる、おぞむ、けすむ、ちじける、 ぼとつく、など
「恐れるさま」	ぼとぼと、ひしゃひしゃ、へそへそ、ひろひろ、 ひろーひろ、びろびろ、びろーびろー、ちりちり、 ちーちー、ちるちる、ちっち、ちりっちりっ、など

上記以外に、島根県の方言に「がんながんな」～「がながな」という表現も

ある。これは「恐れふるえるさま」を意味する。また、この同じ表現は「寒そうにするさま」も表す。

「寒い」という意味の語彙には以下のような語がある。これらにも上で説明した語などと同様、「わぢわぢ」系の語はみられない。

ひやっこい、しゃっこい、さっけ、ばぶい、つがらしか、せせらびえー、
わるわるさむい、じけじけ、こげーる、こぎーる、がんながんな、など

ここまで、日本語の方言において「わぢわぢ」の意味に基づき、怒りや恐怖、または寒さに関する語彙をみてきたが、「わぢわぢ」と同源の語は確認できない。

次に震える様子を表す日本語方言の語彙をみてみる。徳川・他（2016）によると、以下のような語がある。

うずぶれる　（寒さに縮こまり震える）
うつぐうつぐ　（寒そうに鼻汁をすすりながら震えているさま）
かまける　（寒さに震える）
ぎゃだぎゃだ　（震えるさま）
ごのごの　（寒さや恐怖のために震えるさま。がたがた。ぶるぶる）
じかじか　（寒さで震えるさま）
びりつく　（畏れて震える。縮み上がる。恐縮する）
びりこく　（畏れて震える。縮み上がる。恐縮する）
ふーれる　（震える。戦慄する）
わくわく[19]　（寒さなどで震えるさま。わなわな。ぶるぶる）
わしわし　（寒がっているさま）
わだわだ　（怒ったり恐れたりして震え上がっているさま。ぶるぶる）
わっくわっく　（寒さなどで震えるさま。わなわな。ぶるぶる）
わったわった　（寒さのために震えているさま。ぶるぶる）

これらの語は寒さや恐ろしさ、または怒りで震えるさまを表す語であることが

わかる。この中で「わしわし」「わだわだ」「わったわった」「わくわく」「わっくわっく」は語の意味以外に、語の構造や音声の観点からみて「わぢわぢ」に類似する。この類似する５つの語が「わぢわぢ」と同源であるか分析を試みる。

まず始めに、これらの語がどこの地域で使われているかを確認しておきたい。徳川・他（2016）に、「わしわし」と「わだわだ」両語とも青森県で使われており、「わったわった」と「わっくわっく」は岩手県気仙郡で、「わくわく」は岩手県気仙郡、秋田県鹿角郡、山形県、長野県、福岡市で使われているとある。まとめると以下のようになる。

わしわし、わだわだ	青森県・津軽[20]
わったわった、わっくわっく	岩手県気仙郡
わくわく	岩手県気仙郡、秋田県鹿角郡、 山形県、長野県、福岡市

「わくわく」は比較的広い地域で使われているが、「わしわし」「わだわだ」「わったわった」「わっくわっく」は東北地方の２県で使われていることがわかる。

「わしわし」だが、青森の方言で「し」は [sɨ] と発音するため（平山・他 1992：76)、「わしわし」は [wasɨwasɨ] と発音する。先の項「日本語古語「わぢわぢ」について」であげた用例が示しているように、古語辞典や国語辞典では古語「わぢわぢ」は「わじわじ」または「わぢわぢ」と表記されている。この表記が示しているように発音されていたとすると、この語は [wadʒiwadʒi] のような発音だったと推測される。青森方言の「わしわし」が古語「わぢわぢ」と同源であるならば、[wadʒiwadʒi] > [wasɨwasɨ] の変化があったということになる。

青森方言には以下の音声に関する特徴がある。

(i) 共通語の「じ」[dʒi] に対応する音声は青森方言で [dzɨ] である。（平山・他 1992：76)[21]

(ii) 語中のザ行・ダ行・バ行の子音の直前に鼻音を伴う現象がある。（此島

1982:227）例：　[kwa^{n}dzɨ]（火事）、[ma^{n}do]（窓）、[ka^{m}be]（壁）

(iii)[22] 直前に鼻音を伴った「び」[bɨ]、「ぶ」[bü]、「じ」・「ず」[dzɨ] は無声音化する場合がある。（平山・他 1992：76-78,1659）

「び」　[bɨ]　>　[pɨ̥]　[kü^{m}pɨ̥ta]（首）

「ぶ」　[bɯ]　>　[pü̥]　[ne^{m}pü̥ta]（ねぶた）

「じ」・「ず」　[dzɨ]　>　[tsɨ̥]　[mɨ^{n}tsɨ̥kɛ]（短い）、[wa^{n}tsɨ̥ka]（僅か）

これらの特徴を基に [wadʒiwadʒi] > [wasɨwasɨ] の変化を考察してみると、以下のような変遷の過程が見えてくる。

(i)　(ii)　(iii)

[wadʒiwadʒi] > [wadzɨwadzɨ] > [wa^{n}dzɨwa^{n}dzɨ] > [wa^{n}tsɨ̥wa^{n}tsɨ̥] > [wasɨ̥wasɨ̥]

古語「わじわじ」[wadʒiwadʒi] は青森で [wadzɨwadzɨ] と発音されていたが、上の（ii）の変化が起こり [wa^{n}dzɨwa^{n}dzɨ] となった。その後、(iii）の変化を経て、最後に [^{n}tsɨ̥] > [sɨ̥] が起こり現在の「わしわし」[wasɨ̥wasɨ̥] となった。このように上に示した (i)～(iii) の青森方言の特徴に基づき、[wadʒiwadʒi] から [wasɨwasɨ] への変遷過程の説明が可能である。従って、青森の「わしわし」は「わぢわぢ」と同源であると考えられる。

青森県津軽で使われている「わだわだ」はより古い文献[23] にみられる「わだわだ」(恐れわななくさま、恐ろしくぶるぶるふるえるさまを表す語。わなわな。）（日本大辞典刊行会 1976）と同源であると思われる。

次に、岩手県気仙郡の「わったわった」だが、結論から言えば、古語「わだわだ」が変化した形だと考えられる。岩手県の方言では語中の /k/ /t/ /c/ は有声化しそれぞれ [g] [d] [dz] と発音する。[hago]（箱）、[adama]（頭）、[mɨdzɨ]（道）がその例である。しかし、[hasɨ^{t}ta]（走った）や [ę^{k}kaę]（一回）などのように促音の直後では有声化は起こらない[24]。（本堂 1982:248）　このため、「わったわった」の「た」は無声音であるとの説明が成り立つ。

徳川・他（2016）によると、岩手県気仙郡には「わったわった」以外に「わっくわっく」[wa^{k}kü wa^{k}kü] と「わくわく」[wakü wakü] も「寒さなどで震えるさ

ま。わなわな。ぶるぶる」の意とある。前者は「わったわった」と同様、直前に促音があるため「く」は [kɯ̈] だと説明が可能だが、後者は語中の /k/ が [g] ではなく [k] であり、音韻的に不規則であることがわかる。これは秋田、山形、長野にも共通する。このことから「わくわく」は比較的新しい語だと思われる。音声的にみても「わっくわっく」と「わくわく」は同系関係があると判断することが可能であるが、「わぢわぢ」から派生した語とは考えにくい。このことから、「わぢわぢ」と同源の可能性のある語は「わしわし」だけとなる。

5　まとめ

本稿は沖縄語で使われている「わじわじー」の共時的及び通時的背景を明らかにすべく分析を行なった。沖縄語においては多くの地域の方言で広く使われている語であるが、琉球諸語全体では国頭語にもみられる。しかし、宮古語、八重山語、与那国語にはみられない。

この「わじわじー」は日本語の古語「わぢわぢ」と同源である。「わぢわぢ」は寒さや恐怖または怒りのため震えるさまを表す語であったが、現代の国頭語・沖縄語の方言の多くにおいて「わじわじー」は「腹を立てる。怒る」という意味で使われている。沖永良部島では「わじゃわじゃ」(がたがた震えているさま)という語、与論島には「わじゃぶるい」(ぶるぶる震えること）という表現もあり、「腹を立てる。怒る」の意味はなく震えるさまをあらわす語として存在する。

「わぢわぢ」は室町時代前期から江戸時代の文献にみられ、特に室町時代末期から江戸時代の浄瑠璃や浮世草子などの資料に多くみられる。

現代の日本語の方言において「わぢわぢ」と同源の語は青森方言に「わしわし」(寒がっているさま）として残っているが、他には確認できない。新しい語は言語の接触により、言語から言語へ伝播していくことを考えると、青森県の近隣や以南の地域でも広く使われていたと推測する。

「わぢわぢ」は九州、奄美諸島の言語や方言が接触することによりに琉球語へ伝わったと考えるのが自然である。しかし、現代の九州方言や奄美語諸方言などに「わぢわぢ」系語の痕跡はない。これらの地域では「わぢわぢ」系の語

は失われたのだろう。琉球語において「わじわじー」がみられるのは国頭語と沖縄語に限られるということから、伝播の波は宮古諸島、八重山諸島、与那国島へは届いていないということになる。しかし、竹富島方言に「わじわじー」が借用され使われている例があることからこの伝播は完全に止まってしまったのではなく、現在も続いている可能性は否定できない。

註

1．「わちわち」「わぢわぢ」「わじわじ」などのような表記があるが、本論文では日本語古語を指す場合「わぢわぢ」と表記する。
2．軍記物語。1379 頃までに成立。例は長谷川（1994:136）による。
3．『史記』の註釈書。1477 年成立。例は岡見･大塚　(1971:394)　から抜粋。
4．浄瑠璃。例は鳥越・他校注・訳（2012:496）から抜粋。
5．浮世草子。例は 麻生・冨士（1976:171）から抜粋。
6．浄瑠璃。鳥越・他校注・訳（2012:96）から抜粋。
7．連歌・俳諧。 中村俊定（写）（1936）から抜粋。
8．浮世草子。例は金田一・他（1978）による。
9．『日本国語大辞典』（日本大辞典刊行会 1976）に「寒さや恐怖、怒り、興奮などで体が激しくふるえるさまを表す語。がたがた。ぶるぶる。」とある。
10. 富浜（2013）には [tsɨmuidiʲi] とある
11. この語は富浜（2013）から抜粋。
12. 下地（2017）には [baɐaddziː] とある。
13. 「過去形」。（琉球大学沖縄文化研究所 1968:33）
14. 「「根性起こる」の意」とある。（前新 2011:424）
15. これ以外にも「怒る」や「怒っているようす」を表現する語彙は多くあるが、いずれも「わじわじー」とは異なるため、省略する。奄美語や宮古語、そして八重山語についても同様である。
16. この項であげる語彙は、徳川・他（2016）による。語例の使われている

地域については、特に論考に関わる場合を除き、郡名や市町村名など詳細は省略した。

17. 「怒る。憤る。また、ふてくされて当たり散らす。ふすぶる」の意。（徳川・他 2016）
18. 「怒る。怒って不平を言い散らす」の意。（徳川・他 2016）
19. 「わくわく」は岩手県気仙郡、秋田県鹿角郡、山形県、長野県、福岡市などの地域で使われている。このうち秋田県鹿角郡については、内田（1936:223）は「ワク。ワク。」と表記しているが、「ク。」が示す音声については不明。長野県方言における「わくわく」の意味については、上原（1976：263）は「わなわな。心が落ち着かない様子」と記述している。
20. 徳川・他（2016）に「わだわだ」が使われている地域については「青森県津軽」と記されているが、「わしわし」については「青森県」とある。
21. 「ず」[dzɯ] も [dzi] となる。（平山・他 1992：76）
22. 語例は赤川方言の例である。青森市の方言にも同様の現象がある（此島 1982:228）。
23. 『狭衣物語』（1069 ～ 77 頃）など。徳川・他（2016）
24. 共通語とは異なり、促音は非常に短く 1 モーラとは認識されない。（本堂 1982:248）

参考文献

麻生磯次・冨士昭雄　（1976）『西鶴織留』　明治書院

伊是名島方言辞典編集委員会　（2004）『伊是名島方言辞典』　伊是名村教育委員会

上原邦一　（1976）『東信濃方言集』　国書刊行会

内田武志　（1936）『鹿角方言集』　刀江書院

内間直仁・野原三義　（2006）『沖縄語辞典　那覇方言を中心に』　研究社

大野晋・佐竹昭広・前田金五郎　（2008）『岩波古語辞典』　補訂版　岩波書店

岡見正雄・大塚光信編　(1971)『抄物資料集成』 第一巻　史記抄　清文堂
長田須磨・須山名保子　(1977)『奄美方言分類辞典　上巻』 佐久間書院
長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 (1980)『奄美方言分類辞典 下巻』 佐久間書院
生塩睦子　(1999)『沖縄伊江島方言辞典』 伊江村教育委員会
菊千代・高橋俊三　(2005)『与論方言辞典』 武蔵野書院
金田一春彦・三省堂編修所　(1978)『新明解古語辞典』 第二版　三省堂
国立国語研究所編　(1976)『沖縄語辞典』 五刷発行　大蔵省印刷局
此島正年　(1982)「青森県の方言」『講座方言学　4　−北海道・東北地方の方言−』, 213-230.　国書刊行会
下地賀代子 (2017)『つかえるたらまふつ辞典―多良間方言基礎語彙』 多良間村教育委員会
時枝誠記・吉田精一編　(1983)『角川国語大辞典』 蔵書版　角川書店
徳川宗賢・佐藤亮一・大岩正仲・小学館辞典編集部・ネットアドバンス (2016)『日本方言大辞典』 ネットアドバンス
富浜定吉　(2013)『宮古伊良部方言辞典』 沖縄タイムス社
鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・坂口弘之校注・訳　(2012)『近松門左衛門集』 (2) (3) 小学館・ネットアドバンス
新村出　(2008)『広辞苑』 第六版　岩波書店
仲宗根政善　(1983)『沖縄今帰仁方言辞典』 角川書店
中田祝夫・和田利政・北原保雄　(1983)『古語大辞典』 小学館
中村俊定 (写)　(1936)『小松原』 下　[只丸編]　(書写資料) 早稲田大学古典籍総合データベース
中本正智　(1976)『琉球方言音韻の研究』 法政大学出版局
中本正智　(1982)「沖永良部島田皆方言の語彙」『琉球の方言』 7:7-63.
波平憲一郎　(2007)『久米島町字儀間　しまくとぅば辞典』
日本大辞典刊行会編集　(1976)『日本国語大辞典』 小学館
長谷川端校注・訳　(1994)『太平記』 小学館・ネットアドバンス
平山輝男　(1986)『奄美方言基礎語彙の研究』 角川書店

平山輝男・大島一郎・中本正智（1966）『琉球方言の総合的研究』 明治書院
平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』 明治書院
平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編（1992）『現代日本語方言大辞典』 明治書院
本堂寛 （1982）「岩手県の方言」『講座方言学 4 −北海道・東北地方の方言−』, 237-270. 国書刊行会
前新透 （2011）『竹富方言辞典』 南山舎
宮城茂子・宮城壯成 （2016）『安波フトゥバ − 国頭村安波の方言 -』
宮城信勇 （2003）『石垣方言辞典』 沖縄タイムス社
宮城信八 （2000）『シマフュトゥバ 大宜味村田嘉里の方言』
山城正夫 （2009）『シマくとぅば − 旧石川市山城（ヤマグシク）』
琉球大学沖縄文化研究所 （1968）『宮古諸島学術調査研究報告（言語・文学編）』 琉球大学沖縄文化研究所

Abstract

On *Wajiwajii* in Ryukyuan

Moriyo Shimabukuro

It has been pointed out that the word *wajiwajii* [wadʒiwadʒiː] in Ryukyuan and the old Japanese word *wajiwaji* are cognate. However, it is not known whether the word completely disappeared in Japanese or is still used in some dialects, only Ryukyuan retains the word, all Ryukyuan dialects still use it, there is a difference in meaning between the old Japanese word *wajiwaji* and *wajiwajii* in Ryukyuan, and so on. There are many questions to be answered. This paper attempts to provide some answers for these questions. Especially it focuses on the following questions: (i) What is the meaning of the old form and that of modern forms? (ii) When and how the old word was used? (iii) Which of modern Ryukyuan languages/dialects still retain the word? and (iv) Which of modern Japanese dialects use the word if any?